The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1930年代金沢の観光都市への転換 ： 「産業と観光の大博覧会」開催をめぐって
Author(s)	小川, 玲美子
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56400
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

1930年代金沢の観光都市への転換
──「産業と観光の大博覧会」開催をめぐって ──

小　川　玲美子

キーワード
地方博覧会，産業と観光の大博覧会，モダンスタイル，金沢市，観光地開発
provincial exhibition, Exhibition of the industry and the tourism, modern style, Kanazawa city, tourist development

はじめに
１．博覧会開催の経緯
２．博覧会のデザイン傾向
３．博覧会の影響
おわりに

はじめに

幕藩体制下において，加賀百万石と呼ばれた巨大雄藩であった金沢市には必ずと言っていいほど「歴史」や「伝統」,「工芸」という言葉が付随する。また観光都市として名高いこの地域では2015年に北陸新幹線の開通を迎え，ますますこうしたイメージを前面に押出した都市アピールが推進されるだろう。しかし金沢市が行政として本格的に観光産業に取り組みを始めたのは他の都市と比べると比較的遅く，1932年の「産業と観光の大博覧会」がその端緒であるとされる。

この博覧会は1932年４月22日から同年６月５日の55日間，金沢市出羽町練兵場と金沢城の２会場に分けて開催された。博覧会名誉総裁は前田利為侯爵，総裁は当時の石川県知事である平賀周，会長は当時の金沢市長吉岡一太郎，副会長に金沢商工会議所会頭の中島徳太郎が任命され，会期中の動員は560,840人を記録している[1]。これは当時の金沢市人口の161,252人の３倍以上であり，昭和初期に全国で同時多発的に行われていた博覧会の入場者数と比較しても，決して低い数字ではない。本論では，金沢市が観光都市へと変貌するきっかけとなったこの博覧会を総合的に検討し，これが金沢市の都市としての姿にどのような変化を与えたのかを考察する。

本稿は217回研究例会（2014年２月15日，於：京都市立芸術大学）での発表に基づく。

１．博覧会開催の経緯

１−１．明治から大正期における金沢市

明治期の金沢市行政が目指すものは，第一に「市勢の回復」であった。藩政期，武士の人口比率が４割近かった金沢市では，明治政府の打ち出した身分制の廃止によりその特権を奪われて困窮する士族が続出し，武士から仕事を請け負うことの多かった職人たちもまた，受注先を失い，経済的苦境に立たされていた。そこで金沢市は殖産興業，士族授産事業を展開することによって，沈滞していく市の経済を立て直そうとした。主な例として旧士族の実業家，長谷川準也が創設した金沢製糸場や，金沢銅器会社などが挙げられる。幸いにもこの頃欧米ではジャポニスムが興隆を迎えていたため，日本の美術工芸品の売り上げが好調であった。金沢市では輸出工芸品の生産が経済的に大きな役割を担うようになっていた。

ここで留意したいのは，現在でこそ観光都市としての性格が強い金沢市だが，明治期から大正期にかけてほとんどと言って良いほど行政が観光事業に注力した形跡がないことだ。観光地の開発は，多くの場合は鉄道網の普及によって興隆するものだが，金沢市の場合，この整備に時間がかかっていた。北陸線（米原―金沢間）が開通し，京阪神間との連絡が整ったのも1898年になってからであり，これは1889年の東海道線の開通よりも９年遅い。またこの頃，金沢市内では繊維業が盛んであったため，あえて観光に頼る理由はあまりなかったとも言える。

1932年，国際観光局によって全国観光機関の調査[2]が行われているが，これによると石川県において，観光機関は白山市の「白山振興会」のみである。藩政期来の文化遺産が多く残存し，市街近郊には温泉地が複数点在しているなど，観光地としてはかなり有利な条件が整っていたにも関わらず，金沢市の経済構造は工業が中心であった。

しかし1929年にニューヨークのウォール街に起こった世界恐慌により事態は一変する。巨大な輸出相手であるアメリカの経済不況は日本にも大打撃を与え，我が国に昭和恐慌を招いた。特に羽二重を多く輸出していた金沢市は，売行不振にあえぐ繊維業の依存から脱却しなければならなくなり[3]，市内の経済構造を見直す大きな転機となった。そこでこの経済危機から脱け出すため，行政が目を向けたのが観光業であった。折しも昭和初期，1930年代は外客誘致，つまり国際観光の重要性が国策として叫ばれていた時期であった。

１−２．市内における国際観光の動きと博覧会開催の経緯

昭和初期の観光は1930年４月18日の勅令による鉄道省国際観光局の設置を抜きには語れないだろう。日本政府，鉄道省は外貨の獲得を狙い，外国人旅行客を誘致する為，各地を国際観光地や国際観光ルートに選定し，また洋式の設備を整えた国際観光ホテルを建設するなど，地域のインフラ整備を行った。これにより近代的な観光地として生まれ変わった地方都市は少な

くない。例として明治期から外国人の避暑地であった長崎県の雲仙国際観光ホテルなどが挙げられるだろう。しかし国際観光局が国際観光地や国際観光ルートに選定していたのは主に表日本と呼ばれる太平洋側が中心であった。

もちろん全国的に高まる国際観光の気運に，金沢市も無関心ではなかった。この頃『北國新聞』上においても外客誘致の重要性に言及した記事や，国際観光局の動向を注視している様子が取り上げられていた。1931年には当時の国際観光局長新井堯爾が金沢市商工会議所を訪れており，同年『北國新聞』３月10日の記事では，この新井の来沢は金沢市が当時国際観光局によって選定されていた国際観光地へ指定される予兆なのではないかと期待されていた。結果としてこの直後に金沢市が国際観光地に選定されることはなかったが，上述のような関心の高まりは当時国際観光地への選定が地域にとって大きな経済効果をもたらすのではないかという期待を示している。そして国際観光局が選定する国際観光地の決定時期に重なるようにして，金沢市主催「産業と観光の大博覧会」の開催が1931年に決定した。

しかし折悪しく，1932年１月，上海事変が勃発し，衛戍地を金沢とする陸軍第九師団が中国へ派兵されることとなった。これに際し，金沢市内では時局への憂慮から，観光という娯楽要素の強いテーマを掲げることは不謹慎ではないかとの声が挙がったが，博覧会長であった吉岡一太郎金沢市長は「断固開催」の意向を貫いた[4]。吉岡がこれ程まで強く開催の意思を主張したのは，やはり上述の経済不振からの脱出口をこの博覧会に見出そうとしていた為ではないだろうか。

大正から昭和期にかけ，全国各地では種々の博覧会が開かれていた。当時行われていた博覧会の多くは産業振興を主題としたものが多く，昭和元年，1925年から本博覧会が行われた1932年まで42の博覧会が開催されているが[5]，内「産業」「勧業」をメインとしているものは15ある。事実，本博覧会会誌においても「平凡ナル産業博覧会の名称デハ既ニ中毒傾向アリテ[6]」と記述されており，そのような状況の中，金沢市は他の博覧会にはない特色として，観光をメインテーマに掲げた。観光を主題とする博覧会は，この産業と観光の大博覧会が非常に早い例である。それ以降は1933年に奈良市制三十五周年記念観光産業博覧会，1934年に長崎県において国際産業観光博覧会が開催されている。全国各地において国際観光の重要性が叫ばれている中，歴史遺産，温泉などの観光資源を多く有していた為，金沢市が観光業に目をむけたのはごく自然な流れだと言えるだろう。明治期には十分ではなかった鉄道網も昭和初期までには整備され，遠方からの集客を見込める環境が整い始めていたことも追い風になった。

２．博覧会のデザイン傾向

２−１．金沢市における都市デザイン

博覧会は産業振興，技術紹介，そして最先端のデザイン，文化の啓蒙や紹介の場所でもある。そこでは新しい技術や提案にふさわしい新たなスタイルのパビリオンが求められた。例えば1914年の東京大正博覧会では，ゼツェッション様式がパビリオンに用いられ，1921年に上野公園で行われた平和記念東京博覧会の堀口捨己によるパビリオンは，1920年に堀口らが東京帝国大学を卒業と同時に結成した分離派建築会の会員が設計した表現主義風なスタイルで話題を呼んだ[7]。

戦前の博覧会は当時の欧米における新たな建築様式を取り込むことで，大衆に当時の世界最先端デザインを紹介する好機となっていた。また，短期間に多くの耳目を集める博覧会は，若手の建築家にとって格好の実験場であり，新しいデザインをデモンストレーションする装置として最適であった。さらに，大正期から昭和前期にかけてもてはやされたモダンスタイルのデザインは装飾性がそぎ落とされ，幾何学的な構成からなっており，終了したらすぐに取り壊される仮建設のパビリオンにはうってつけでもあった。では産業と観光の大博覧会が開催される以前の金沢市には，モダンスタイルの建築はなかったのだろうか。

まず，現存している代表例として，1924年に完成した石川県庁舎（現石川県政記念しいのき迎賓館）（図１）が挙げられるだろう。これは国会議事堂建設の責任者でもあった大蔵省の矢橋賢吉と笠原敏郎が担当したとされる[8]。また，その11年前，1913年に建設された日本専売公社煙草工場（現金沢市立玉川図書館，近世資料館）の設計も，同じく大蔵省の臨時建築部が行っており，矢橋が担当した可能性が考えられている[9]。専売公社が煉瓦造りで，所謂様式主義，歴史主義的な外観をしているのと対照的に，石川県庁舎が当時の最新技術である鉄筋コンクリートが使用され，外壁をスクラッチスタイルで覆い幾何学模様が配され，11年の間に金沢市内に新しいデザインが導入され始めたことが窺える。

そして昭和に入ると市内各所で新技術の鉄筋コンクリート造りのモダンスタイルの建築が登場する。石川県庁舎設立の翌年，1925年には，藩政期には城下の商人町として繁栄を誇っていた尾張町に武田五一が設計を手掛けた，石黒ファーマシー（現石黒ビル）（図２）が完成している。このビルの屋上では市内で初となるビアガーデンが営まれ，若者の社交場として支持を受けていた。博覧会と同年の1932年には，上述の石黒ファーマシーに卑近の武蔵ヶ辻に，村野藤吾設計の加能合同銀行本店（現北國銀行武蔵ヶ辻支店）（図３）が建設されている。この建物はルネッサンスとゴシックの折衷形式様式を採用しつつ，ファサードは表現主義風な放物線状のアーチが連続しており，地方都市に新たな息吹を伝えようとしていた[10]。また村野は同年，尾張町近くの十間町で中島商店ビルの設計も担当している。

また，武田や村野のように大都市で仕事をすることが多かった有名建築家以外に，地元の建築家がモダンスタイルの建物を設計する例もある。武田の石黒ファーマシーと同じ尾張町にある村松商店ビル（図４）は，鉄筋コンクリート２階建てで，1928年に竣工している。装飾は単純化され，矩形の窓が連続するファザードは当時かなり奇抜であったに違いない。装飾的な隅柱からはアール・デコの影響が伺え，当時の金沢市内には同じような意匠を持った建築はほとんどなかったとされている[11]。

石川県庁舎の建設を皮切りに，藩政期の色彩が濃い街並みにも，大正期から昭和期にモダンスタイルの建築が次々と建設されており，博覧会開催までには，ある程度金沢市内において新たな技術や意匠が受け入れられていた状況を窺うことができる。

図１　石川県庁舎

図２　石黒ファーマシー

図３　加能合同銀行本店

図４　村松商店ビル

２-２．パビリオン

産業と観光の大博覧会のパビリオンは（図５）の通りである。

また市内大手の宮一大丸デパートの食堂，有名カフェーが出張して店舗を出すなどし，本博覧会は金沢市を挙げての開催となった。本博覧会には３府33県17市，北海道，台湾，樺太，朝鮮，満州が出品し，出品団体は約200，出品総数は30万点を超えた。会期中は「東京デー」や演劇館の催しものなどのイベントが頻繁に開催されており，また新聞記者大会などの各種団体大会も本博覧会を機に金沢市で開催されている。

パビリオンの設計は金沢市の土木課が担当し[12]，その意匠は「構成派」，つまり構成主義を意識したとされている[13]。しかし，本博覧会おいて，構成主義の意匠を用いた理由に，上述の東京平和博覧会で堀口ら分離派建築会が歴史・様式主義からの離脱をパビリオンデザインで提示したような思想的背景があるとは考えにくい。事実，博覧会の公式誌，『金沢市主催　産業と観光の大博覧会誌　完』（以下博覧会誌）の，「設計方針及工事設計監督」の項において，その意匠を採った経緯が以下のように言及されている。

如何にして観覧客誘引上の魅惑をその外観に盛るか，而して建築の様式そのものは社会思想の具現化であるといふ原則から当博覧会は，此の世界的不景気のドン底において，我が金澤市が全裏日本をリードし，将に来たらんとする裏日本時代に向かつて断然飛躍せんとする。時代精神の尖端を行くべく，その表現としては新興構成派の構想を緯とし，時代精神の尖端の表現を経とし（後略）[14]

本博覧会が時代の最先端の意匠を用いて日本海側地域を代表する都市であることを標榜しようという目的が強く汲み取れ，そのデザインは，衆目を集めるための新奇さに主眼が置かれており，これを対外的アピールの手段として強く意識していることが読み取れる。

例えば来場者が最初に目にする博覧会の玄関口，《第一会場正門》（図６）は，左右非対称なフォルムや，幾つもの円柱や角柱の組み合わせ，幾何学形態の複合する構成，幾何学模様の多用など，確かに構成主義的な要素が多く見られるが平行と垂直を意識した構成はアール・デコ風とも言える。この正門は博覧会事務局が最も配慮したとされている。絵葉書や博覧会出品者への賞状，記念メダルにはそのファザードがモチーフとして使用されており，博覧会を象徴する建築だったことは確かであろう。

第一会場		
パビリオン	その他	施工者
本館（2368坪）、美術工芸館（228坪）、学芸館（210坪）、農産館（254坪）、機械館（326坪）、余興館（41坪）、機械館別館	正門（140坪）、事務局、売店噴水塔（168坪）	八日市屋清太郎
迎賓館（62坪）、絹業館・ラジオ館（219坪）、逓信館（104坪）		真柄要助
朝鮮館（97坪）、台湾館（120坪）、林業館（48坪）、樺太館（100坪）、満蒙館（140坪）、北海道館（108坪）、名古屋館（170坪）、奈良館（47坪）、東京館、岐阜館（31坪）、海女館（84坪）、親鸞館（188坪）、日支事変館（150坪）、義士館（54坪）、演芸館（331坪）、水族館	子供の国、	その他

第二会場		
パビリオン	その他	施工者
観光館（357坪）、迎賓館（24坪）		真柄要助
恩賜館		その他

図５　博覧会パビリオン一覧

第一会場にあった《第一機械館》，《第二機械館》（図７）は船を連想させるフォルムで，こちらもアール・デコ風な印象を受ける。また正門を入って目の前に現れる《噴水塔》は垂直な平面の連続がユニークであり，インターナショナルスタイル，ゼツェッション風な印象を与え，更に，《音楽堂》（図８）の舞台中央億から広がる放射状の同心円からは表現主義的な印象を読むこともできる。もちろん《奈良館》《東京館》や《満蒙参考館》《臺湾館》《朝鮮館》などの

特別館には，館の地域性に沿ったデザインが採用されている。しかしその他多くのパビリオンに関しては，当時の流行であった幾つかのモダンスタイルが混在して取り入れらており，全体が構成派，構成主義にまとめられていると言えなかった。

本博覧会のパビリオンの中で注目をしたいのが，《演芸館》（図９）である。これは博覧会協賛会員の和澤外茂吉の協力によって約１万円の巨費を投じて建てられ，博覧会の目玉とするべく，本館右側会場の最も人の往来がある位置に建設された。建坪は319坪，高さ53尺（17.5m）の２階建てで，建物上部には風車が回り，入り口玄関には彫刻が置かれていた。正面玄関は一見すると上述の他のパビリオン同様のモダンスタイルを採っているかのように見えるが，図面の側面部を見てみると，伝統的なお茶屋風な意匠が採用されていることが窺える。演芸館では金沢の四つの茶屋街（西・東・北・主計）が協力し，来場者に博覧会の為に製作された「四季の金澤」という踊りを披露していた。このパビリオンでは金沢の地域性がモダンスタイルへ脱皮しようと模索する姿を表しているかのようである。伝統的な茶屋街の演劇場の雰囲気を保ちつつ，それにモダンスタイルが融合されている。

本博覧会のパビリオンはそのほとんどがランカイ屋八日市屋清太郎と真柄組（現真柄建設）によって施工された。競争入札を行った内の一人である八日市屋清太郎は当時のランカイ屋を代表する一人で，全国各地，様々な博覧会仕事を手がけていた。ランカイ屋とは博覧会の開催が各地で盛んに行われていた明治期から昭和期にかけ，博覧会建築や装飾を生業にしていた大工である。

図６　第一会場正門

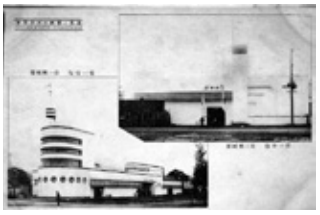

図７　右上：第一機械館
左下：第二機械館

図８　音楽堂

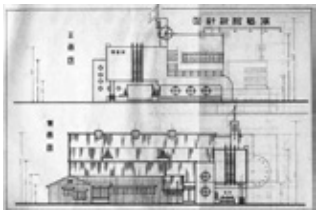

図９　演芸館設計図

八日市屋は1873年に現在の石川県小松市に生まれ，13歳のときに金沢市の呉服屋へ奉公に出た。本格的に博覧会業務へ携わったのは1914年に上野公園内で開催された大正展覧会が最初であるとされている[15]。その後，博覧会誌において「其の専門的建築請負で全国的名聲を博しつつある[16]」と評される通り，主に昭和初期に東亜勧業博覧会（1927年），御大典奉祝名古屋博覧会（1928年），朝鮮博覧会（1929年），広島市昭和産業博覧会（1929年），観艦式記念海港博覧会（1930年），小樽海港博覧会（1931年）などの博覧会建築を次々に手がけ，まさに

「博覧会屋（ハクランカイ屋）」のに恥じない働きぶりであった[17]。八日市屋が本博覧会で施工を行ったのは《第一会場正門》,《本館》,《美術工芸館》などで，その他にも売店，博覧会事務局を手がけている。これらの仕事は会場建坪数の約８割であり，八日市屋の仕事の規模の大きさが窺える。

２-３．展示デザイン

パビリオン内部の装飾はどうだったのか。本博覧会のテーマの中心である観光をメインとした《観光館》を例に見てみよう。

《観光館》（図10）は全31館中３番目の規模で旧金沢城本丸跡地の第二会場を使用していた。《観光館》の他に第二会場を使用していたのは《迎賓館》と《恩賜館》のみでこの３館で第二会場を占めていたことからも，やはり主催である金沢市が如何に観光に注力していたのかが見て取れる。『商工会議所報』1932年３月号によると，「金澤市主催「産業と観光の大博覧会」の特徴ともいふべき第二会場観光館の設備については博覧会当局が最も力を入れているところ」であり，また「こうした観光館の設置は今度の金澤博覧会が最初の試みで各方面より多大の期待を持たれ，参加各県も大張込み（ママ）で郷土紹介の妙案を練つている[18]」ので，観光をテーマとした金沢市の博覧会方針が全国各地で行われていた各種の博覧会の中でも斬新であると述べられている。

図10　観光館

図11　観光館内部

博覧会誌によるとこの《観光館》における出品区域は，「日本海沿岸ニ限ルモノトシ其ノ他ハ一般博覧会に準ジ全国道府県朝鮮樺太台湾満州南洋廳管下[19]」であり，日本海側，つまり裏日本に限定されている。それまでの国内観光ルートは表日本（太平洋側）を中心に展開されてた為，北陸を含む裏日本にまで外国人旅行客および国内の旅客の足は日本海にまで伸びなかった事実が金沢商工会議所によって指摘されており[20]，こうした自覚がこの出品区域になったと考えられる。

観光資料からは博覧会出品の審査点数計2,906点から43点が審査対象に挙がった。審査は４月22日より始まり，名誉金牌が２点，金牌が３点，銀牌が４点，銅牌が４点の計13点であった。観光資料の受賞は他の館に比べて決して多いとは言えず，博覧会誌の「審査概評」におい

て，その基準が以下のように設定されたと述べられている。

> 其の出品された地方に於ける観光地としての風光設備交通の利便等を考慮に入れ之れを参考としたことは勿論でありますけれども，主として出品物の配列考案照明の良否によりて現れた，即ち出品物の有する総合的の表現効果を基礎として審査を行った[21]。

しかし，審査総長の男爵斯波忠三郎[22]からは以下のような発言があり，空間表現の拙さなどが批判され，あまり高い評価はなされなかったようだ。

> 観光資料品の出品は（中略）その目的とする所は地方風光の宣伝，地方土産の即ち観光地の開発にありまして出品者は皆よく此の目的に添ふべく大なる努力を払はれたると窺ひ得たけれども，多くは未だ旧様式に捉われた観があつて，斬新なる表現法を考案せるもの少なく，（場所に対して出品点数が多かったりして）出品物が栄えなかつたのは遺憾であつた[23]。

審査員は金沢市が国際観光局員へ依頼しており[24]，審査部長に新井の次代国際観光局長である佐原憲次が任命された。その他の審査員を国際観光局事業課長江口胤顕，鉄道局旅客課長鈴木清秀，国際観光局事務官平井義富，鉄道省旅客課事務官三輪真吉，ジャパンツーリストビューロー（現 JTB）主事山中忠雄などが務め，ここからも博覧会が国際観光局と連携を図ろうとしていたことが窺える。更に，『北國新聞』1932年４月22日の記事は鉄道運輸局鈴木清秀から以下のような意見が出ていることを報じている。

> 地方の観光紹介は発展上有意義なことで博覧会の試みとしては結構なことである。出品物の造作上から言えば配列と説明が拙い。説明の字体や写真の悪いのは遺憾な点が多い。特に観光地紹介に意を置いていないのは好機会を徒に失するものとして惜しい，ヂオラマでは採光方法にもつと意を用ひて欲しいものだ，殊にネオンサインを使用したのなどは赤色が多く（ママ）過ぎて前傾（ママ）を害ね観光，風光を没却せしめるもので注意すべきことである，これは金をかけすぎた広告店に利用され過ぎた結果で甚だ遺憾である。

鈴木はあまり芳しくない評価を下しているが，これは当時の国際観光局の海外宣伝の水準に鑑みれば当然だと言えよう。当時国際観光局は対外宣伝の為，雑誌『国際観光』などを出版し，世界に通じるグラフィック表現を実行しようとしており，洗練されたデザインを見る目を局員

が持っていたことは想像に難くない。さらに海外博覧会の最先端の展示品，手法を目のあたりにしている彼等からすれば，博覧会の経験があるとは言えない金沢の展示デザインは意に満たないものだったのかもしれない。

2-4．その他のデザイン傾向

この博覧会開催に際してポスターが２種製作されている。

最初に製作されたポスター（図12）は石川県工業高等学校の山脇雄吉[25]の監修の下，石川県工業試験場図案科の中山修三[26]によって制作された。上部には機体に「KANAZAWA EXHIBITION」と書かれた飛行機が大きく配置され，その下には石川県，主に金沢市内と博覧会会場の鳥瞰図が展開されている。中央に尾山神社や金沢城，更には温泉地（温泉記号）などの観光名所が配され，後述の２回目に配布されたポスターとは異なり，地域色の強いものとなっている。

図12　１回目ポスター

２回目に発表されたポスター（図13）は石川県立工業高等学校の教員，吉岡吉太郎によって製作された。吉岡は1914年に同校を卒業し，同年東京美術学校（現東京藝術大学）図案科に入学した。その後，1925年に佐賀県有田工業学校より石川県立工業高等学校図案科に転任し，1929年には図案科部長に就任した[27]。また吉岡は1926年発行の『商工省第十三回工芸展覧会受賞図録』に，《丸形沈赤菓子器》の作者として名を連ねており，この時期にさかんにデザイン活動を展開していたことが窺える。

図13　２回目ポスター

吉岡案のポスターは，中央に女神の全身像が描かれ，足元に建物，飛行機などが極端に抽象化して配され，垂直を意識した構図で，アール・デコ的な意匠となっている。１回目に配布された中山のものとは対象的に，このポスターは地元色をそぎ落としたデザインになっており，石川県の地図と路線が描かれているが，ほとんどが隠れていて地形の全体像は不明瞭である。更に，文字情報がなければ金沢市の特徴はほとんど見られない。２点を製作した中山と吉岡，両者とも石川県工業試験場や石川県立工業学校といった地元施設に所属しており，これらのポスターは金沢在住のモダンスタイルの担い手の存在を強調しているかのようである。

また，本博覧会に際し，種々の記念品が製作されている。今回，その内の一つである銀製の

花瓶[28]，を確認することができたのでここに紹介する。博覧会の公式誌によれば，この銀製花瓶は直接事業に携わった役職員千余名に対し贈呈された。花瓶のモチーフには吉岡が製作したポスターの意匠がそのまま用いられており（図14，図15），吉岡のポスターがいかに博覧会を印象づけるものであったかが窺える。

金沢美術工芸大学が所蔵している水野源六家資料には，この銀製花瓶のものと考えられる図案《銅器花器類原図》が見い出された（図16）。水野源六は藩政期より加賀象嵌などの伝統技術を代々受け継ぐ金工師であり，製作年代から推定すると図案は10代水野源六が製作したのであろう。この花瓶は金沢市の持つ藩政期来の工芸技術とモダンスタイル，つまり伝統的なものと革新的なものが輻輳されており，博覧会自体の性格を表しているかのようである。

左：図14　博覧会記念銀製花瓶表
右：図15　博覧会記念銀製花瓶裏

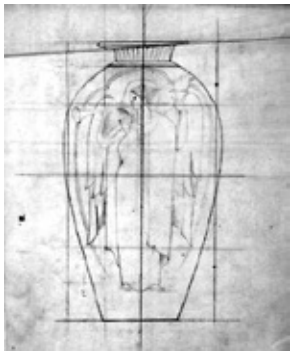

図16　水野源六家資料
《銅器花器類原図》
縦24.0㎝×36.2㎝，１冊12枚

３．博覧会の影響

博覧会誌には交通量（市電・市内乗合自動車，金沢駅乗降客成績）の変化，旅客者宿泊人数，商品陳列所の成績等が記述されている。確かに宿泊人数で比べてみると，博覧会開催の前年同期とでは約15,800人の旅客数が増えており[29]，博覧会開催時４月から６月にかけての集客数が増大であることを物語っている。しかし，これらの来場者数，交通量などは一過性なものに過ぎない。それよりも博覧会開催が金沢市の景観や，観光に与えた影響について注目したい。『北國新聞』1931年２月18日記事では「金澤駅の改築」と題し，本大博覧会による旅客増員が懸念され，金沢駅の改築案が出ていることが報じられた。

> 今の金澤駅はお粗末なものであり，都市の美観という点から見ても非難せらるるところが多い（中略）その建築様式からして明治時代における洋風建築の最もぎこちない手法を臆面もなくさらけ出して居り，美観といふ点から見れば殆ど問題にならない建築である。

ここでは未だ駅舎が旧来の建築様式を採っていることを批判している。モダンスタイルの集

大成である博覧会に来沢する人々の玄関口となるため，駅の意匠にも最先端のものを求めようとしていたのである。結局，金沢駅に関しては，あまり大きな改築はなされなかったが，博覧会を契機とし，都市景観そのものや観光設備を見直す気運が生まれたことは注目すべきだろう。更に，1883年に建設された金沢市公会堂も改築が望まれるようになった。更に，『北國新聞』1932年４月６日記事は「産業と観光の大博覧会を機会に金澤市の主要道路は殆ど舗装されて面目を一新した」と報じている。

また，博覧会開催にあたり，金沢市として問題となっていたのは観光インフラの欠落である。前述の1931年の国際観光局長新井の訪問の際，吉川市長は新井から金沢市内に洋式の宿泊施設が不足していると指摘されている。これを踏まえ，市内では和式旅館を洋式のホテルに改築する案が出ており，『北國新聞』1932年３月９日の記事はその概要を報じている。

> 香林坊一帯の近代化および公会堂の増築も実現し武蔵が辻でも加能合同銀行の改築も近く竣成する筈であるが金澤三越の真向ふにある八百屋物問屋青駒事青梅駒次郎氏は断然現代の建物を改築して鉄筋五階建ての近代ホテルを建築経営することとなり（後略）

青駒（図17）のように，博覧会を機に金沢市に洋式客室のある旅館やホテルが登場するようになり，金沢市の観光環境は次第に変化し始めた。博覧会は金沢市の都市整備の基調をモダンスタイルへ転換させる契機となり，観光都市金沢への脱皮を促した。博覧会が開催された翌年の1933年には，建物にモダンスタイルを採る金沢観光協会（図18）が設立され，1934年には金沢駅前に観光会館が開館し，観光都市への転換が具体的に開始されたのであった。

図17　ホテル青駒

図18　金澤観光協会パンフレット

おわりに

産業と観光の大博覧会のパビリオンは構成派などのモダンスタイルの建築意匠を採用した。そうした意匠の採用は当時の最先端の流行に則り，金沢市がほかの都市と比べても何ら劣るこ

とはないことを示そうとする意思表示であった。それは一見して刹那的で軽佻に捉えられる現象かもしれない。しかし，逼迫した経済状況下でも，博覧会の断固開催を決定した熱意に鑑みると，このモダンスタイル採用の経緯は軽視することはできない。つまり，当時の金沢市行政は歴史遺産に頼るのではなく，現代的な遊興地としての都市イメージを新たに作り上げようとしていたと考えられるのだ。確かに，博覧会全体のデザインにはあまり目新しさは感じられないかもしれない。事実，出品物のディスプレイ表現などに稚拙さがあると指摘されている。しかし，パビリオンのデザインに関しては，後発の地方都市としては他県で開催されていた博覧会のものと比較しても何等遜色はなく，本博覧会によって，従来にない都市イメージを目指そうとした主催者側の熱意の成果と見ることができる。これを促す町並みの転換も金沢で始まっていたのである。

また，本博覧会の記念品の銀製花瓶をとってみると，地元の図案家が製作したモダンスタイルのポスターのモチーフが，金沢市に伝来する伝統工藝技術によって表現されており，こうした新傾向を生み支えるデザイナーとその製作システムが育ってきていることが読み取れる。これは当時の金沢市が目指そうとしていた新たな都市としての姿や，地域の性格や特徴の優位性を開こうとした好例だと言えるだろう。1930年代に主に地方都市が模索した新たな都市像形成への有力な指標となっているように思われる。

謝　辞

本稿執筆にあたり，藤原淳美氏，石川県立工業高校鶴野俊哉氏に多大なるご高配を賜りました。また，森仁史先生より多数のご教示を賜りましたことを，ここに記して感謝の意を表します。

註

1　金沢市役所『金沢市主催　産業と観光の大博覧会誌』金沢市，1932年，p. 16

2　調査は1932年７月15日時点のもの。国際観光局『全国観光機関調』1933年，p. 8

3　1928年の絹織物総生産額が11,593,245円であるのに対し，昭和恐慌後の1932年の額は1928年の半数以下である4,140,873円に落ち込んでいる。金沢市『金沢統計書』第四編 金沢市，1932年，p. 50

4　『北國新聞』昭和７年３月８日。

5　『別冊太陽　日本のこころ133　日本の博覧会』平凡社，2005年，p. 232

6　前掲註１，p. 14

7　藤森照信『日本の近代建築（下）』岩波書店，1933年，pp. 173-174

8　金沢市編さん委員会『金沢市史　資料編17　建築・建設』金沢市，1998年，pp. 228-229

9　前掲註８，p. 224

10　石田潤一郎，松隈洋監修『第11回村野藤吾建築設計図展』京都工藝繊維大学美術工藝資料館，村野藤吾の設計研究会，2012年，p. 18

11　前掲註８，p. 235

12　前掲註１，p. 53

13　『金沢商工会議所月報』昭和７年４月号，p. 8

14　前掲註１，p. 58

15　橋爪伸也『人生は博覧会　日本ランカイ屋列伝』晶文社，2001年，pp. 70-72

16　前掲註１，p. 60

17　八日市屋清太郎『きん盃受領記念の綴り』1931年に掲載の八日市屋が授与した賞状一覧より。

18　『金沢商工会議所月報』昭和７年３月号，pp. 3-4

19　前掲註１，pp. 14-15

20　『金沢商工会議所月報』昭和５年11月号，p. 2

21　前掲註１，p. 303

22　理工学者。金沢市玉川図書館・斯波文庫には『平和記念東京博覧会事務報告』1924年などの博覧会の公式記録が所蔵されており，斯波がこれらから博覧会に関する知識を求めていたことが窺える。

23　前掲註１，p. 303

24　同年４月12日より佐原は来沢していたが，観光館は未完成であった為，21日に更に鈴木と江口，三輪を迎え審査に至った。『北國新聞』昭和７年４月21日。

25　山脇雄三（1875-1945年）は東京美術学校日本画科を卒業し，可能友信，高村光雲に師事した後，板谷波山と共に来沢，石川県立工業学校の図案科教諭となる。

26　1989年に石川県立歴史博物館で開催された「昭和モダン　1920～1940」展では，中山が1930（昭和５年）に制作した《婦人室用友禅染衝立》が出品されている。

27　高堀勝喜『七十年史』石川県立工藝高等学校創立七十周年記念会，1957年，p. 167及び，2014年５月22日に行った石川県立工業学校鶴野俊哉教諭へのインタビューによる。